

## 学則の変更の趣旨等を記載した書類

### 1. 学則変更（収容定員変更）の内容

令和3年度から大学院音楽研究科作曲専攻修士課程の入学定員を2名から18名増やし20名とし、大学院全体の収容定員を128名（完成年度）とする計画である。

（単位：人）

| 専攻      | 現行        |           | 変更後       |            |
|---------|-----------|-----------|-----------|------------|
|         | 入学定員      | 収容定員      | 入学定員      | 収容定員       |
| 器楽専攻    | 28        | 56        | 28        | 56         |
| 声楽専攻    | 12        | 24        | 12        | 24         |
| 音楽教育学専攻 | 4         | 8         | 4         | 8          |
| 作曲専攻    | <u>2</u>  | <u>4</u>  | <u>20</u> | <u>40</u>  |
| 計       | <u>46</u> | <u>92</u> | <u>64</u> | <u>128</u> |

### 2. 学則変更（収容定員変更）の必要性

#### （1）大学院の特色

洗足学園音楽大学（以下、「本学」）は、大正13年、創設者の前田若尾が東京府荏原郡平塚村（現在の品川区小山2丁目付近）に設立した平塚裁縫女学校を起源とし、「若き学徒をして、真の人生の目的に目覚めさせ、さらに人間の天職を悟らせ、謙虚にして慈愛に満ちた心情（謙愛の徳）を養い、気品高く、かつ実行力に富む有為な人物を育成する。」が建学の精神である。

その建学の精神のもと、本学大学院は、教育基本法及び学校教育法にのっとり、学部教育の基盤の上に、音楽の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、専攻分野における研究能力、又は高度な専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うとともに、建学の精神に基づいて人格を陶冶し、謙愛の徳を備え、気品高く、国際的視野に立ち、実行力に富む人材を育成し、もって文化の向上に寄与することを目的としている。学校法人洗足学園は創立100年を

迎えるが、建学の精神に基づく思想、大学の目的等については、今日においても普遍的であり、このような人材を連綿と養成し、輩出してきた実績からみても、その理念・目的は適切かつ的確であったと言える。

本学大学院は、大学4年間で培った専門分野の更なる研究と、学生1人ひとりの目標を深く追求するため、一層個別性の高い指導を行っており、人材養成及び教育研究上の目的として、具体的には、次の各号にかかげる事項を教育目標としている。

- ① プロフェッショナルな演奏家、あるいは先端を行く音楽研究家、次代を拓く教育指導者としての専門的職業に必要な演奏・表現能力、あるいは研究能力を修得・開発すること。
- ② 幅広い国際的な視野に立った音楽活動・研究活動を実践できる実力をもった音楽家としての素養を具備すること。
- ③ 各自の自律性および個性を尊重し、専攻テーマに即した専門的・個別的な研究、あるいは社会的な貢献を目指した自発的な企画・研究を推進すること。

## (2) 定員変更の必要性

本学大学院は、平成12年の音楽研究科修士課程設置当初、4専攻（作曲、器楽、声楽、音楽教育学）に、7のコース（ピアノ、管楽器、弦楽器、打楽器、声楽、音楽教育学、作曲）を設置する組織構成としてスタートした。設置から今日まで教育研究の対象となる音楽分野の領域を広げ、ピアノ、オルガン、電子オルガン、管楽器、弦楽器、打楽器、和楽器、声楽、音楽教育学、作曲、音楽・音響デザインの多彩な11コース編成である。

これまでも本学大学院は、教育基本法及び学校教育法にのっとり、学部教育の基盤の上に、音楽の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめて、専攻分野における研究能力、又は高度な専門性を要する職業等に必要な高度の能力を養うとともに、建学の精神に基づいて人格を陶冶し、謙愛の徳を備え、気品高く、国際的視野に立ち、実行力に富む人材を育成してきた。ここ数年、特に作曲専攻への海

外からの入学志願者の増加が非常に顕著であり、今後も更なる発展を遂げるため、高等教育機関として、社会からの需要が見込まれるデジタルテクノロジーを活用した音楽領域の教育研究活動を積極的に推進し、継続的に充実・発展、拡張させていく必要があると考えている。以下のような状況に基づき対応が必要なことから、作曲専攻の学生定員を増加させることとした。

#### ①高度で専門的な音楽家の育成と当該分野の状況

本学大学院は、修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）において所定の在学年数を満たし、音楽研究科が定める教育目標及び教育課程に沿って必要な学修成果を修め、その証として、所定の単位を修得し、修士論文若しくは特定の課題についての研究成果の審査及び最終試験に合格した者に修士（音楽）の学位を授与することとしており、特定の課題については、修了演奏若しくは修了作品及び副論文をもって充てることができるとしている。

「何ができるようになるか」に力点を置き、どのような学修成果を上げれば修了を認定し、学位を授与するのかという方針を具体的に、ディプロマポリシーとして以下のとおり示している。

- （ア）自らの専門分野の高度で専門的な知識・技能あるいは研究能力を用いて、独創的な発想や思考を適切に表現することができる。（専門性、専門実技）
- （イ）社会への開かれた関心と態度を身に付け、その多様性を理解し、共感することができる。（多様性の尊重）
- （ウ）自らとは異なる意見・価値観・感性・文化を持つ他者と協働することができる。（協働する力）
- （エ）国際社会に貢献しようとする実践的態度を身に付けている。（社会貢献・国際貢献・実践的態度）
- （オ）論理的思考力に基づき、自ら問題を発見し解決することができる。（論理的思考力・問題解決力）
- （カ）社会における自らの専門分野の意義と役割を理解し、専門家として主体的で創造的な研究活動を継続することができる。（プ

## ロフエッショナル)

平成 17 年中央教育審議会答申「新時代の大学院教育－国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて－」では、大学院は「創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等の養成」、「高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成」、「確かな教育能力と研究能力を兼ね備えた大学教員の養成」及び「知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の養成」という四つの人材養成機能を担っており、高等教育の中でもとりわけ知識集約型社会における知の生産、価値創造を先導する「知のプロフェッショナル」を育成する役割を中心的に担うことが期待される存在と述べられている。

本学大学院は、音楽学部の基盤の上に、専攻分野における研究能力、または高度な専門性を要する職業等に必要な能力を養うことを目的としている。実技系においては基本的に、プロフェッショナルな演奏家になるための研究活動を行うことを目指している。そのような高い専門性を追求していく段階においては、教員の指導を待つのではなく、学生一人ひとりが自ら目標を設定し、研究活動を行い、成果を確認するという、自立した研究活動が中心となる。したがって、音楽研究科においては学生一人ひとりの自立的な研究内容を尊重し、それに合わせた専門的、個別的な教育課程とすることを目指しており、身に付く能力として、(専門性、専門実技)、(多様性の尊重)、(協働する力)、(社会貢献・国際貢献・実践的態度)、(論理的思考力・問題解決力)、(プロフェッショナル)が挙げられる。その結果、近年では、ピアノ、管楽器、弦楽器、打楽器、声楽コースのコンクール受賞者が増えており、フランス社会功労奨励章(ENCOURAGEMENT PUBLIC)(フランス国内外で社会、専門的職業、芸術分野で功績があった個人、団体に贈られる褒章)、川崎市アゼリア輝賞(文化、芸術等において近年顕著な活躍が見られ、将来更なる活躍が期待される若い世代の個人に対し贈られる文化賞)、東久邇宮国際文化褒賞なども受賞するなど活躍が目覚ましく、今後もこのような高度で専門的な音楽家を多数養成することかますます重要であ

ると考えている。

現代の音楽制作においてはコンピュータをはじめとする様々なデジタルテクノロジーが用いられ、それらを柔軟に使いこなす操作能力が必須となっている。クラシック・ポップスなどの従来型の音楽からアニメやゲーム音楽などの最新の映像音楽に至る楽曲制作を行うサウンドクリエイター、映像コンテンツの制作や効果音の作成ができるメディアクリエイター、スタジオレコーディングやホールレコーディングなどを中心に録音に関する技術を修得するレコーディングエンジニア、コンサート・ライブにおける音響(PA・SR)を担うサウンドエンジニア等々を養成する作曲専攻音楽音響デザインコースでの学びは今後の音楽制作を志す者の基礎的な学びとなると考えている。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大を通じて、生音を享受する音楽からデジタルテクノロジーを介して音を享受する音楽へと時代が変貌しつつある。そのような時代において、高度で専門的なデジタルテクノロジーの操作能力に長けた音楽人材の養成が、新たな時代の音楽家養成機関にとってますます重要な使命となると考えている。

## ②産学官民の連携

平成27年9月15日に公表された中央教育審議会大学分科会「未来を牽引する大学院教育改革 ～社会と協働した「知のプロフェッショナル」の育成～ (審議まとめ)」では、社会の急速な変化に対応しつつ学生を多様なキャリアパスに導く大学院教育を推進するためには、教育課程の企画段階からキャリアパスの確立まで、産業界や公的研究機関等が参画した取組が効果的である。近年、各大学の努力や産業界の協力により、特に産業界と距離の近い分野を中心に、学生や社会人を対象にした産学連携の教育課程や中長期のインターンシップ等の取組が進んでいる。このため、各大学と企業においては、

- ・教育課程や中長期インターンシップの内容について、密な意見交換を行うこと

- ・大学院生が研究者として参加する産学共同研究を推進すること
  - ・あらかじめ知的財産や技術流出防止のマネジメントに関して、必要な学内ルールを整備するとともに、学生も含めて周知を徹底した上で、具体的な運用を大学・企業双方で協議すること
  - ・共同研究を行う国立研究開発法人や企業等は、学生のRA（リサーチ・アシスタント）雇用を推進すること
  - ・クロスアポイントメント制度の活用など様々な方法により、大学教員と企業研究者の人事交流を推進すること
  - ・企業は、採用に当たりどのような知識、能力、経験を重視しているのかについて学生や大学側に明示すること
- などに取り組むことが期待されると示されている。

本学大学院における産学官民の連携は次のとおりである。

#### 「音楽のまち・かわさき」推進協議会（川崎市外郭団体）

「音楽のまち・かわさき」推進協議会が主催する「おんまち・みぞのくちライブ」（平成29年5月ノクティプラザ2階）に8名が出演。これ以降、毎年2回、大学院生が出演。

「音楽のまち・かわさき」推進協議会からMC、会場設営、PAセッティングのアルバイト募集依頼があり、平成29年度からアルバイト開始。

#### 小黒恵子童謡記念館（川崎市所有）

川崎市出身の詩人で童謡作家の小黒恵子の自宅を遺贈された川崎市が、平成29年4月に小黒恵子童謡記念館をリニューアルオープン。

小黒恵子オープニングコンサートにピアノ鈴木舞衣（平成28年修了生）、ピアノ小林夏菜美（平成28年修了生）、テノール：草間勇貴（修了生）ヴァイオリン：腰高多恵（大学院2年）チェロ：鈴木黎子（修了生）ピアノ：溝口愛実（大学院2年）が出演。

#### さいたまプラザイーストホール（公財）さいたま市文化振興事業団主催

さいたま市のプラザイーストホールにて定期的に行われてい

るロビーコンサートに、本学大学院修了生が出演する機会を毎年2回出演の機会を得る。

マリンバ：阿久澤美和（平成28年修了生）、ピアノ：小林夏菜美（平成28年修了生）、ピアノ：石澤優花（平成28年修了生）、ピアノ：

森岡姿帆（大学院1年生）が出演。

#### 神奈川県民ホール（公益財団法人 神奈川芸術文化財団）

平成29年6月、神奈川県民ホール（公益財団法人 神奈川芸術文化財団）が招聘したユリシーズ弦楽四重奏団（ニューヨークで活躍）と本学大学・大学院とのフレンドシッププログラム&ミニコンサート開催。（水野佐知香教授企画）

#### 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会

平成29年10月、「大学院ピアノ指導法公開講座 ～全日本ピアノ指導者協会専務理事 福田成康氏を迎えて～」を開催。ジュネーヴ音楽院亀田真弓教授によるグループ講義における観察と実践の授業実施。

#### 一般社団法人 全日本ピアノ指導者協会

大学院において、平成30年度よりピティナ・指導者育成委員による指導法の講座がスタート。前期は座学でピアノ指導の現場で使える知識を、後期は指導者ライセンスの「指導実技」の形式で学生に10分間の指導をしていただき、そこに立ち合いの指導者育成委員がアドバイスをする形式。

#### スタインウェイ&サンズ東京（スタインウェイ・ジャパン株式会社）

スタインウェイ&サンズ東京では、有望な学生ピアニストによる『ライラコンサート』を開催。

平成30年1月、2月にピアノコース学部3年石津若葉、院1年森岡姿帆が出演。

#### 小栗哲家（舞台監督）

平成 30 年 9 月、日本舞台協会元理事、株式会社アートクリエーション元代表取締役の小栗哲家氏を講師として招聘し、「舞台制作・舞台監督の仕事」をテーマに大学院特別講座を開催。小栗哲家氏は舞台監督として海外有名オペラハウス引越し公演、サイトウ・キネン・フェスティバル松本、ヘネシー・オペラシリーズ、日本オペラシリーズを手がけた。

#### 昭和大学スポーツ運動科学研究所

平成 29 年本学教員・院生を対象とした「ピアノ演奏時の視線と頭位変化」「音楽家の上肢と声の障害」について共同研究をスタート。

洗足論叢において「ピアノ所見演奏に対する演奏指導が頭頸部および視線の動態変化に及ぼす影響」吉武雅子研究科長、昭和大学スポーツ運動科学研究所と共同執筆。

#### 昭和大学スポーツ運動科学研究所

平成 29 年度大学院生対象に特別講義 3 回開催。

テーマ「音楽家のためのバイオメカニクスと体幹筋トレーニング」「自分のからだを知ろう・音楽家のための体幹トレーニング」など

#### 子どもの音楽文化体験事業（高津区役所）

子どもの音楽文化体験事業の一環で、高津区内子ども文化センターへ演奏者派遣し身近な場所で子どもに音楽体験をさせるもの。

平成 29 年度から 2 つの文化センターへ大学院生を派遣。

#### ヤマハ 銀座店（株式会社ヤマハミュージックリテイリング）

ヤマハ銀座店の協力によりヤマハ銀座コンサートサロンにおいて演奏会を開催。

「大学院リサイタルシリーズ 2019 優秀選抜生による洗足学園音楽大学大学院コンサート」

- ・ 日時：令和 2 年 2 月 8（土）17：00 開演
- ・ 料金：無料 ・ 定員：80 名
- ・ 出演者：（ギター）大貫淳也（ピアノ）鈴木祐実（打楽器）

一瀬珠音（ヴァイオリン）林桃子（ピアノ）石津若葉（フルート）尾崎ゆか（声楽）鈴木里奈（サクソフォーン）鈴木麻裕

社会の急速な変化に対応しつつ、大学院生を多用なキャリアパスに導く大学院教育を推進するため、産学官民の連携による教育プログラムの開発・実施等に取り組むことが期待されている。音楽活動や教育研究の成果を社会に還元すること、芸術文化の振興・充実を図ることは極めて重要な役割と認識しており、今後も地方自治体、大学、企業との社会連携・地域連携の規模の拡大を推進するものである。

### ③ 優秀な外国人留学生の戦略的な受入れの推進

平成 23 年中央教育審議会答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」において、欧米のみならずアジアを含む諸外国の大学と連携し、日本人・外国人学生の垣根を越えた交流を通じた協働教育により、語学力を含むコミュニケーション能力や、異文化を理解し多文化環境下で新しい価値を生み出す能力を備えたグローバル人材を養成することが必要と述べられている。

本学大学院においては、外国人学生の増加が顕著に見られ、特に作曲専攻音楽・音響デザインコースは、中国、台湾、韓国を中心に、ゲーム音楽、アニメソング、劇伴を専攻する学生が増加している。これらのコンテンツについては、日本が誇る文化であり、自身の研究目標を実現するために、個々の研究テーマに合わせた自由度の高い、発展的なカリキュラムを編成するとともに、実践を重視した教育体制を整えている本学で学ぶ意義は大きい。また、日本人学生においても外国人学生との交流から新しい価値を生み出す環境であり、同答申が推進する内容に則している。

本学での研究活動を経て、卒業後は国内外問わず活躍の場が広がっている。国内においては、外国人学生を積極的に採用する企業も増え、近年ではゲーム会社、その他音楽関連企業への就職実績があ

る。また、海外、特に中国のゲーム会社、映画会社等においては、日本での研究成果が評価されるため、人材需要としては非常に高い。

このように、本学が掲げる教育目標のもと、国内外を問わず活躍する人材を輩出しており、グローバル化が進展する中で大学院が果たすべき役割を果たしていると考えられる。

また、前述の「未来を牽引する大学院教育改革」において、国際的に魅力ある大学院教育を構築し、外国人留学生の受入れや日本人留学生の派遣など人的交流のための環境整備を進めることは、アジア各国をはじめとする世界から優秀な高度人材を惹き付ける効果があり、若年人口が減少している我が国にとっては、将来の発展や競争力の強化の観点からも極めて重要である。各大学院においては、

- ・ダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーの導入
- ・優秀な外国人留学生を獲得するための国際的なアドミッション体制の整備
- ・英語のみで修了可能なコース等の設置など魅力あるカリキュラムの構築
- ・学生・教職員の交流の推進
- ・外国人留学生に対する日本企業等への就職支援の充実
- ・海外のサテライトキャンパス・オフィスの整備
- ・外国人留学生等のレジデントハウスの整備
- ・各国の奨学金制度等による外国人留学生の受入れを推進

など、大学院教育を中心とした国際化を積極的に推進することが求められると示されている。

この答申を受け本学大学院においては、優秀な外国人留学生の受入れを推進してきた。その志願者、入学者数、留学生数、出身国内訳の推移は図表1のとおり。

【図表 1】 志願者・入学者と留学生の内訳推移（単位：人、比率）

|         | H26        | H27         | H28         | H29         | H30         | H31         | R2          |
|---------|------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 志願者数    | 42         | 43          | 61          | 63          | 75          | 76          | 92          |
| （内、留学生） | 1          | 6           | 8           | 8           | 14          | 31          | 58          |
| 入学者数    | 39         | 40          | 57          | 59          | 69          | 68          | 78          |
| （内、留学生） | 1          | 6           | 6           | 8           | 14          | 28          | 49          |
| 比率（％）   | <b>2.6</b> | <b>15.0</b> | <b>10.5</b> | <b>13.6</b> | <b>20.3</b> | <b>41.2</b> | <b>62.8</b> |
| （出身国）   |            |             |             |             |             |             |             |
| 大韓民国    | 1          | 0           | 0           | 1           | 1           | 1           | 0           |
| 台湾      | 0          | 0           | 1           | 1           | 1           | 2           | 3           |
| 中国      | 0          | 5           | 5           | 6           | 12          | 24          | 46          |
| アメリカ    | 0          | 1           | 0           | 0           | 0           | 1           | 0           |

この留学生の増加は、戦略的な受入れ策によるものである。音楽学部と同様に、大学院においても外国人留学生の増加傾向が顕著であることから、平成 31 年度、外国人留学生が確かな実力と豊かな個性を持ち、国際社会におけるリーダーとして羽ばたかせるべく、国籍・人種・地域・宗教・性別を問わず、世界各国・地域から受け入れることを目的として、新たな外国人留学生入学試験の入試区分を設けることにした。また、熱意を持ち、成績が優秀で、心身健全であることを受給の資格として、外国人留学生奨学金制度を設けた。その成果として、平成 31 年度外国人留学生入学試験志願者は 31 名でその内 28 名を受入れしており、令和 2 年度志願者は 58 名（前年度比＋27 名）で、49 名（前年度比＋21 名）の受入れをしている。

また近年、中国での電子オルガン人口の増加が著しいことから、大学院修了生の協力の元、日中サマープログラムを開催している。内容としては、本学において中国人受講生を募り、本学教員によるマスタークラスの個人レッスンを受講、本学学部生・大学院生、中国人受講生による日中交流コンサート“Friendship Concert”の開催、本学電子オルガンコンサート“電子オルガンによる管弦楽曲、ピアノ協奏曲の夕べ”の鑑賞といったプログラムであり、修了式で

は全プログラム受講者に修了証を授与している。日本の音楽大学としてはいち早く、クラシックとポピュラーの両音楽ジャンルを専門的かつ横断的に学べる実践カリキュラムを確立していることから、受講生は年々増加しており、大学院の学生募集において、優秀な外国人留学生の確保に繋がっている。

そのほか、本学大学院では、留学生による留学生のための支援“大学院アクティブサポート”を実施している。この支援は、留学生が専門分野での学修・研究を行う上での課題・問題を解決するために総合的かつ積極的なサポートをすることを目的としている。留学生にとって、慣れない日本での生活、教員・学生との係わり方、大学の授業や演奏会、就職や将来のことなど、不安なことが多い中で、留学生が安心してキャンパスライフを手助けのための最初の相談窓口として、音楽の専門分野並びに日本語を習得し、日本の文化、生活習慣、日本人の考え方を学習した大学院留学生が学生の立場に立ってサポートするシステムである。オフィスアワーは、毎週金曜日、18時～19時30分までとし、支援の具体的内容としては、日本語学習の支援、楽典・聴音・ソルフェージュ等の講座科目の支援、オンラインスクールの活用、大学施設・設備の利用方法、演奏会へ向ける心構え、講座・実技試験の概要、キャンパスライフの支援、奨学金について、就職について、留学生交流会の開催など多岐に亘り、手厚いサポートを行っている。

教育・研究においては、外国人留学生の増加に伴い、研究の成果と、外国人留学生の目覚ましい成長を発表する場として、大学院留学生によるコンサートを開催している。平成28年度からスタートしているが、平成31年度は電子オルガン、音楽・音響デザイン、打楽器、クラシックギター、オルガン、二胡、作曲、音楽教育学の大学院生23名が出演した。

以上のように本学大学院は、優秀な外国人留学生を獲得するための戦略的募集策を講じており、教育、研究、施設などにおいても十分な体制の整備が出来ており、アジア各国をはじめとする世界から

優秀な高度人材を受け入れるため、国際化を積極的に推進し継続する計画である。

#### ④多様な属性をもった志願者の増加

本学大学院の平成 27 年度入学試験の志願者は 43 名、入学者 40 名で、入学定員未充足の状況が 4 年間続いていたが、平成 28 年度志願者 61 名、入学者 57 名と定員未充足を解消した。その後の志願者、入学者は増加傾向にあり、令和 2 年度においては、志願者 92 名、合格者 82 名で推移している。志願者数、合格者数、入学者数、入学定員、定員超過率の推移は図表 2 のとおり。

【図表 2】本学大学院の志願者等の推移 (単位：人、倍)

|       | H27         | H28         | H29         | H30         | H31         | R2          |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| 志願者数  | 43          | 61          | 63          | 75          | 76          | 92          |
| 合格者数  | 43          | 59          | 61          | 74          | 72          | 82          |
| 入学者数  | 40          | 57          | 59          | 69          | 68          | 78          |
| 入学定員  | 46          | 46          | 46          | 46          | 46          | 46          |
| 定員超過率 | <b>0.87</b> | <b>1.24</b> | <b>1.29</b> | <b>1.50</b> | <b>1.48</b> | <b>1.70</b> |

本学大学院は、志願者数を回復させる改革と募集戦略を計画的に実施してきた。その取り組みの一つは専攻毎のアドミッションポリシーを策定したことである。大学院設置以来、研究科全体のアドミッションポリシーのみであったが、平成 30 年 4 月に改正し、専攻別に策定した。これにより、本学の求める人材像を、より各専攻入学対象者へ明示することが可能となり、各専攻への志願がしやすくなった。留学生等様々な属性の学生を入学させることと併せて、アドミッションポリシーを明確にすることにより訴求力を高めることができた。

定員変更を行う作曲専攻のアドミッションポリシーは以下の通りである。

「作曲専攻は、作曲と音楽・音響デザインの 2 つの領域がありま

す。作曲では、作品の創作や現代の音楽作品を対象とした作曲法研究を行い、作曲家としての個々の創作活動や研究をサポートできる体制を用意しています。様々な編成での創作に必要な楽器の奏法に関する知識や作曲理論、作品分析に関する能力のある人材を求めています。また、音楽・音響デザインでは、社会のニーズに合った音楽を創造するための高度なテクニックについて修得し、プロとして活躍出来る作曲家、録音エンジニアを育成するプログラムが整備されています。音楽制作、音響に強い関心を持ち、作曲に関する幅広い識見のある人材を求めています。」

前述の留学生受入れ策を含む入試改革と募集戦略において、大きな役割を果たしたのが大学院運営委員会の設置である。大学院音楽研究科長、コース担当教員、統括教員約20名で構成されており、毎月、大学院全般の運営について協議し、議論を重ね、課題の解決や改善、新しい取り組み等について連携・協働をしている。これにより大学院生とのコミュニケーションを密にし、将来設計を具現化する為のきめ細かく最適なサポート体制を整えている。その結果としての入試改革は以下のとおり。

- ・アドミッションポリシーの改正。
- ・3月に一般入学試験Ⅱ期を新設。
- ・作曲コースにおいて、二胡の楽器を募集。
- ・11月に外国人留学生入学試験Ⅰ期を新設。
- ・3月に外国人留学生入学試験Ⅱ期を新設。
- ・入学試験Ⅰ期の出願期間の延長。
- ・面接選考方法の変更。

作曲専攻には、作曲コース、音楽・音響デザインコースがあるが、特に平成31年度志願者数19名の内15名、入学者数17名の内14名が外国人留学生であり、その人数は、前年度比3倍となった。外国人留学生の増加に伴い、音楽・音響デザインコースの学生が増加している。作曲専攻の平成26年度、平成27年度入学試験の志願者、

入学者は3名であったが平成28年度以降の志願者は、4名、7名、9名、19名、36名であり、志願者、入学者は増加傾向にある。一方、入学定員超過率は平成29年度以降3.50倍、4.50倍、8.50倍となり、令和2年度は、14.00倍となっている。志願者数、合格者数、入学者数、入学定員、定員超過率の推移は図表3のとおり。

【図表3】作曲専攻外国人留学生志願者数等推移（単位：人、倍）

|         | H26  | H27  | H28  | H29  | H30  | H31  | R2    |
|---------|------|------|------|------|------|------|-------|
| 志願者数    | 3    | 3    | 4    | 7    | 9    | 19   | 36    |
| （内、留学生） | 1    | 1    | 2    | 3    | 5    | 15   | 33    |
| 合格者数    | 3    | 3    | 3    | 7    | 9    | 18   | 28    |
| （内、留学生） | 1    | 1    | 2    | 3    | 5    | 14   | 25    |
| 入学者数    | 3    | 3    | 2    | 7    | 9    | 17   | 28    |
| （内、留学生） | 1    | 1    | 2    | 3    | 5    | 14   | 25    |
| 入学定員    | 2    | 2    | 2    | 2    | 2    | 2    | 2     |
| 定員超過率   | 1.50 | 1.50 | 1.00 | 3.50 | 4.50 | 8.50 | 14.00 |

また、令和2年度の大学院全体の志願者は92名と大幅に増加し、本学内部進学者だけではなく、国内の他大学、中国、台湾、大韓民国、オーストリア等から志願があり、今後も多様な大学院生を安定して学生の確保が出来る状況である。

本学大学院は、高等教育機関として音楽領域の教育研究活動を積極的に推進し、継続的に充実・発展、拡張させていく必要があると考えており、志願者増に伴う入学定員超過の状況を改善し、定員管理を適正に行うため作曲専攻の入学定員を18名増やし20名とする計画である。

### 3. 学則変更（収容定員変更）に伴う教育課程等の変更内容

#### （1）教育課程の変更内容

本大学院の教育課程は、少人数・双方向型の実践的な教育を基本

とし、「専門必修科目」「専門選択科目」「共通選択科目」を通じて「修了認定・学位授与の方針」に定める力を身に付けることができるように編成している。「専門必修科目」では、個人レッスンまたは少人数による学びを中心とし、専攻・コースの専門分野に関する高度で専門的な知識や能力を身に付ける。「専門選択科目」では、グループによる学びを中心とし、専攻・コースの専門分野に関する応用的な知識や能力を身に付ける。「共通選択科目」では、専攻・コースの枠を超えた横断的・多元的な学びにより音楽的素養を身に付け、その音楽的幅を拡げる。

作曲専攻においては、書法の訓練及び楽曲への分析能力の向上等を通し高い作曲技法を習得させ、真の創造性溢れる作品を産み出すことのできる人材を養成する作曲コースと現代社会のニーズに合った音楽を創造するための高度で実践的なテクニックを身に付けた作曲家などのクリエイターや録音エンジニアなどのサウンドエンジニアを養成する音楽・音響デザインコースを擁している。このように作曲専攻では、人材養成の目的を達成するために、体系的、系統的な教育課程を編成しており、収容定員を変更した場合でも教育上の支障はないものと考えていることから、収容定員の変更に伴う教育課程の変更は行わず、今後必要に応じて教育課程のさらなる整備と充実に努める（資料1）。

## （2）教育方法及び履修指導方法の変更内容

### ①教育方法

本大学院においては、主体的な学びを保証するためのきめ細かな履修指導を行っている。すべての授業科目において授業と連動した活発な学修を促進するため、シラバス等を通じて事前・事後の学修課題を明確化し、単位の実質化を図っている。修了時までには修得すべき知識・能力等が、カリキュラム体系のなかでどのように養成されるのかを示すため、カリキュラムマップで「修了認定・学位授与の方針」で定められた知識・能力等との対応と、それら諸知識・能力等を修得する方法が理解しやすいように配慮している。また、全

ての授業科目において、アクティブラーニングを取り入れた教育方法を取り入れることを基本としている。このように本大学院では、教育の質保障の観点を踏まえ、教育方法の整備と充実に努めており、収容定員を変更した場合でも教育上の支障はないものと考えていることから、収容定員の変更に伴う教育方法の変更は行わず、今後必要に応じて教育方法のさらなる整備と充実に努める。

## ②履修指導、研究指導方法

「修了認定・学位授与の方針」に定めた、修了時までには修得すべき知識・能力等がカリキュラム体系のなかでどのように養成されるのかについて、学生が理解しやすいように履修指導を行っている。また、学生の主体的で活発な学修意欲を促進する立場から、社会的実践の機会を積極的に設定し、様々な形態による公開の成果発表の機会を設け、実践的な体験を通じて学修成果の向上を図っている。

研究指導教員と研究指導補助教員を中心とする複数教員指導体制のもとで、修士論文または特定の課題の研究指導を行っている。本大学院では、教育の質保証システムの整備と確立に向けて、個別の学生に対する履修指導と研究指導体制を整えていることから、収容定員を変更した場合でも教育上の支障はないものと考えている。収容定員の変更に伴う履修指導方法の変更は行わないが、今後も履修指導の充実に努める。

## (3) 教員組織の変更内容

本大学院の研究指導教員数は12名（大学院設置基準上の必要数は10名）、研究指導補助教員数は10名（大学院設置基準上の必要数は5名）。定員を変更する作曲専攻においては、研究指導教員数は2名（大学院設置基準上の必要数は2名）、研究指導補助教員数は2名（大学院設置基準上の必要数は1名）であり、いずれも大学院設置基準を上回る教員組織を編成している。また、大学院全体の教員組織は60代が8名、50代が7名、40代が7名とバランスのとれた年齢構成であり、作曲専攻は、50代1名、40代3名と比較的

若い教員が多く将来性を考慮した年齢構成である。本学は、これまでも教員組織体制の維持と充実に向け、継続的に取り組んできており、すでに十分な教員数を配置し年齢構成のバランスや将来性が図られていることから、今回の収容定員の変更に伴う教員組織の変更は行わないが、収容定員が増えることを踏まえて、今後とも必要に応じて教員組織のさらなる充実に努める。

#### (4) 大学全体の施設・設備の変更内容

作曲専攻、特に留学生数の大幅な増加が顕著な、音楽・音響デザインコースの学生が最先端の技術と指導が受けられるよう、大小5つの録音ブースや2つのコントロールルームを完備したプロユースのレコーディングスタジオや、講義演習室（コンピュータ室）を整備している。同コースは、このレコーディングスタジオに、本学の豊富なコースから様々な楽器を迎え、実際の録音現場のような演習を行うことで、多くの経験を積むことが出来る。或いは、専用のコンピュータ（Mac：72台）の使用により、音楽・音響デザインを理解する上で欠かせないシンセサイザー理論、オーディオ理論を学びながらシーケンソフト（DAW）の操作を修得することが可能となる。

図書館は、地下1階に主に楽譜、図書を収納した閉架式、1階2階に開架式の書架・学生閲覧室・AVルーム等を備え、約8万点の楽譜、約6万冊の図書、約7万点のCD・DVDなどの視聴覚資料を所蔵している。作曲/楽譜作成ソフトウェア Sibelius や Finale を搭載した PC 計 12 台を含む PC 約 90 台を完備、論文執筆や楽譜の浄書、音楽や動画の編集も可能となっている。

作曲コースの学生用には、エチュードステーションの防音・冷暖房完備の個室を学生の自習室に、音楽・音響デザインコースの学生用には、ブラックホールの5室を自習室とし、平日・土日曜祝日及び授業期間以外も利用可能な時間を設け、学生の自主的な学習に供している。

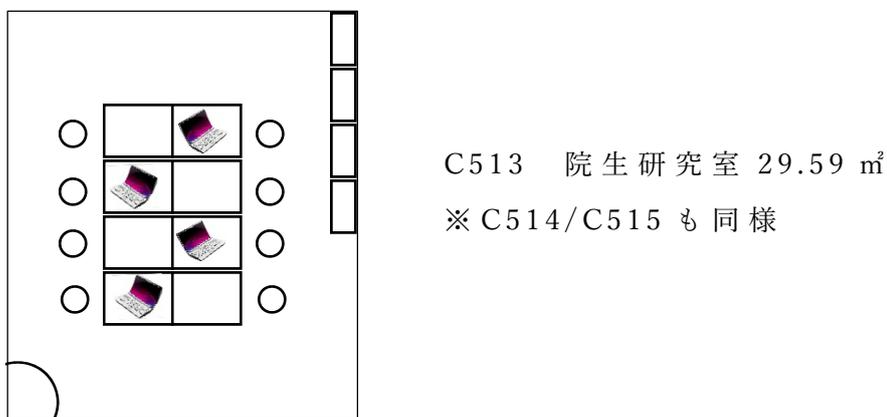
設備についても、ピアノ約300台を始めとして、パイプオルガン、チェンバロ等の設備楽器や弦楽器、管楽器等の貸出用楽器、AV機器

などの教室設備、IT環境など、教育研究活動の多様な展開への必要条件を満たしている。

これら施設・設備については、恒常的に教育研究環境の整備に積極的に取り組み、充実した環境を整えている。

特に、今回の定員変更に伴う大学院生の研究環境として、従来の院生研究室（大学院スタディールーム：パソコン、ロッカー、机、椅子などを配置）を以下の通り3室に増やし、自主的な学習の為の設備の充実を図り対応する。

【図表 4】院生研究室見取図



併せて、大学院生論文・副論文執筆やこれに伴う指導用の施設として、図書館のグループ学習室（L220/L204：パソコン、ロッカー、机、椅子等配置）を提供している。

このように、教育研究環境の整備に積極的に取り組み、特に施設・設備については充実した環境を整えている。学則変更（収容定員変更）に伴う大学院生の研究環境としては、院生研究室の充実を図り対応する。そのほかの施設設備は、今後必要に応じて継続的な整備に努める。